

京都府スーパーサポートセンター 府立学校特別支援教育コーディネーター研究協議会 「京都府立高等学校における特別支援教育の展望」報告

平成26年11月12日(水)



講師

龍谷大学社会学部教授

明星大学教育学部特任准教授

福知山市教育委員会学校教育課

滋野哲秀氏

中田正敏氏

吉田真紀氏

京都府スーパーサポートセンターでは、平成23年度の開設以来、毎年、府立学校特別支援教育コーディネーターを対象とした研修会に取り組んでまいりました。今回は初の研究協議会という形での開催となりました。

1 シンポジウム

各パネリストから、先進的な取組について、及び府立高等学校における特別支援教育の現状について報告

滋野哲秀氏

- キーワード①「発達と認知特性」 入学してから卒業するまでの発達や認知特性を理解することの重要性
- キーワード②「自尊感情」 認められている、褒められているという気持ちをつくることの重要性。不登校等の原因に発達障害があるとされている。絶えず叱られると自尊感情が育たず、不適応を起こす。褒められる、役に立つ体験に集約される。朱雀高校の研究まとめにもあるように、自尊感情の前提として、「教師が生徒に信頼されること」「生徒を信頼すること」が重要
- 高校入学前に生徒の状況や必要な支援を把握してスタートする。職員全体が生徒の情報を共有することが大切。子ども達の様子の変化に気付けるよう、継続した教職員研修が必要



中田正敏氏

- 神奈川では「支援教育」としている。発達障害に注目されるが、高校では課題が複雑化する。
- 「生徒が主体になっている」ということがポイント。医療モデルではない。生徒を主体において困難に陥った時にどうするか。生徒との対話がないと、その生徒を主体にすることはできない。「彼ら」という考え方から「私たち」という考え方へ。話しているうちにニーズがわかってくる。支援のリストのようなものがあって取り組むのではなく「共同構成」の支援
- 障害者の権利条約について。慈善医療的な対応、社会防衛の対象ではない。困難を持っている主体だということ
- インクルーシブ教育は「同じ場で」「連続性のある多様な学びの場」がキーワード。高等学校には通常学級しかない。
- 特別支援教育で「一部の先生がやっている」「あの先生がやるんだよね」とするのは要注意

吉田真紀氏

- 福知山市の連携システム、チーム体制、思春期スクリーニングについての報告
- 中高移行支援シートについて。平成26年度は中学校から高等学校で30ケースがシートにより引継ぎされた。アンケートでは「情報共有、支援策の確認ができた」「家庭との連携がスムーズにできた」等、保護者や学校の安心感にシートが役立ったという意見が多かった。

京都府スーパーサポートセンター 府立学校特別支援教育コーディネーター研究協議会 「京都府立高等学校における特別支援教育の展望」 報告2

田中周平指導主事

- 短期的課題としては、生徒指導上の課題や日々の授業改善
- 中期的課題としては、欠課時数・欠席日数・評価・単位認定・進級等
- 長期的課題としては、進路決定、就労支援、高大連携
- コーディネーター指名、校内委員会設置率は100%だが、実稼働率は改善の余地あり。

伊家京子指導主事

- ユニバーサルデザイン化を考える上で必要な合理的配慮について。
個々の教育的ニーズを把握して支援計画を立てることの重要性
個別の指導計画には長期目標がある。それに向かう短期目標

2 研究協議

フロアからの質問や、参加者から事前にいただいた質問に回答していただきました。

<1 日常的に機能する校内の特別支援教育体制の構築>

- ・校内委員会が年1回しか開催されていない学校もあると聞が、年1回の開催では難しい。どのように開催するかというシステム化がポイント。困難を抱えている生徒の情報が集まるシステムが重要
- ・「相談がうまくいっている」という学校にコツを聞くと、「フォーマルな会議よりインフォーマルな会議がさかん」とのこと。インフォーマルな場があると話しやすくなる。日常的な会話が学校内でどれくらいできるか。会話しやすいようにし向けて行くこと。コーディネーターと一緒に悩むような雰囲気、横に広げる雰囲気
- ・対話のネットワークができていれば、どんな形でもよい。組織が動いている基盤づくりが重要。どの役割の人がコーディネートしようがネットワークがあればそれなりに動く。組織モデルばかり考えるより、話しやすい雰囲気づくりが必要

<2 中高連携>

- ・福知山市の好事例。中学校から高等学校への移行シートは「活用してよかった」という意見が多い。シートを受け取ったら、生徒が入学する前に読むことができる。「たくさん書いてあるがポイントがよくわからない」という意見もあったが、必要な支援がわかった。教職員が情報共有するきっかけとなる。
- ・生徒の入学後に読み直して理解できることもあった。読めば読むほど参考になったという意見もあった。保護者面談でも情報を共有し確認しながら進めることができた。

<3 学校が行う基礎的環境整備と個別の合理的配慮>

- ・授業、学習支援について。高校は後期中等教育だが、学習支援なしに単位不認定という説明は通りにくい。どうしても点数が取れない生徒を多面的に評価する等の教育的支援も必要だと考える。
- ・現在の「合理的配慮」については「盲学校では」「聾学校では」「特別支援学校では」ということしか明らかになっていない。同じことを高等学校ではできない。高等学校の場合、特別支援学校での支援をそのまま持ち込むのには限界がある。独自にするなら基礎的環境整備をしっかりしないと無理。

<4 高等学校卒業後を見据えたキャリア教育、進路指導、就労支援>

- ・田奈高校では厚労省事業を活用し、キャリアコンサルタントを雇った。キャリア支援センターの取り組みは教員だけではできないし、予算面の課題もある。
- ・生徒が学校に在籍しているうちに支援体制をつくることが重要。そして卒業を見据えた進路指導を。高等学校だけでできる取組も程度あるだろうが、教育委員会だけでは難しい。福祉・教育・労働が結びついてできる政策があつてのもの。

<まとめ>

このシンポジウムをきっかけに、府立高等学校における特別支援教育の課題が整理されること、各高等学校の状況に応じて適切な指導と必要な配慮や支援の取組が議論され進展することを願ってやみません。

また、「中教審高等学校教育部会審議のまとめ～高等教育の質の確保・向上に向けて～」（平成26年3月）で、高校における特別支援教育に関して提言された『教育課程の弾力的な運用や指導の工夫による実践の推進』などについての議論が深まることに期待します。